

吉田裕『持たざる者たちの文学史——帝国と群衆の近代』 を読む

A Note on *Literary History of the Destitute* written by Yutaka Yoshida

新城 郁夫
SHINJO Ikuo

琉球大学人文社会学部
University of the Ryukyus, Faculty of Humanities and Social Sciences

キーワード

沖縄 群衆 警察 統治 人種

Keywords

Okinawa; The crowds; Police; Governance; Race

Quadrante, No.24 (2022), pp.187–200.

目次

1. 「群衆」のなかの沖縄
2. 統治の闘争的な界面
3. 「母なるものの更新」と「舌」
4. 「有色」の重ね書きへ

1. 「群衆」の中の沖縄

さきほど阿部さんが、自分は外的なことを言っているかもしれないと言っていたのを聞いて、恐ろしくなりました。私は、外れるものもないような、とんでもない思い付きだけを話していくことになります。さきにお詫びしておきたいと思います。さきほど阿部さんは、吉田さんの本に対し、特にカリブ海という歴史的な文脈、あるいはブラック・カルチャーや黒人の歴史性、政治性を含めた複雑な人種問題の、幅広い理論的なところを押さえてくださいました。

私にはそれができません。さきほど阿部さんの言ったことに全く同感ですが、吉田さんの非常に重厚にして誠実な本を、作品に向き合う誠実さとはこういうことを言うのだと感じながら、私としては、非誠実にどんどん横領しずれてゆく

という形になると思います。

そして、いつも同じような話となってしまう申し訳ないのですが、ずれて行く先がやはり沖縄のことになってしまいます。ただし、この場合ずれていく沖縄は少し吉田さんの思考に導かれて見出されるそれとなります。この場合の沖縄というのは、世界の各所あるいは世界史の各時代で奇妙に出現して消えていくような痕跡のような動きになるかと思っています。こうした連想は、岩崎稔さんの素晴らしい翻訳と監修によりふれることのできた、スーザン・バックス＝モース『ヘーゲルとハイチ 普遍史の可能性にむけて』（共訳・高橋明史、法政大学出版局、2017年〔原著2009年〕）といった成果を念頭におきつつ生じるものでもありますが、横断的な人間の参照の束として沖縄を考えて行けたらと思っています。

それでは始めていきたいと思っています。吉田さんは、ハイチについて触れている章で、どなたかの英語論文を引きながら、「一九三〇年代半ば、英領カリブ海全域で労働争議が起こった」ことに注目されています。そしてまた、本の



最後で、環太平洋、環大西洋にわたる比較冷戦文学史というものが構想できないかと提言されています。私も、その構想に惹かれ、いいなと思っています。そのような見方でしか見えてこない沖縄があるからです。

そこで、吉田さんは先行研究を踏まえながら、3点が重要だと指摘しています。大切な箇所ですので、引用します。

「一つ目は、一九二九年の世界大恐慌だ。タバコや砂糖、石油をはじめとして単一生産品の輸出に依存していたカリブ地域の島々では、商品価格の大幅下落により、経済が破たんしたのだった。二つ目は、人口移動だ。労働力として南米諸国に移動していた人びとが移住先の仕事不足のために帰郷したこと、そして各地域手で地方から都市部への移住によって人口集中および雇用不足が生じたことがあげられる。三つ目は、大都市の知的に運動の影響である。合衆国などへ出稼ぎに行った労働者が見聞きしたのは、マーカス・ガーヴィーをはじめとする人種撤廃運動であり、労働組合への参加を通じて身につけたマルクス主義的な思考だった。それらを各地域に持ち帰ることにより、人種意識への目覚めやより良い生活水準を希求することを人々に促した」(pp.135-136)

私は、この本のなか、群衆たちが、ストライキや争議の中で現われはじめるところがとくに感動的だと思っています。私がここで、1920年代から1930年代の、ハイチとカリブ海を背景にしながらの吉田さんの思考にインスパイアされるのは、そこに沖縄の人間がいたに違いなからなんですね。

例えば吉田さんは、第3章を軸にC・L・R・ジェームスの『ブラック・ジャコバン』のいくつ

かのバージョンを仔細に読んでいくのですが、そのテクスト群が生起させる空間的で歴史的な渦は、沖縄からの移民たちが生きる場所や時間でもあります。1930年代で言いますと、キューバそしてペルーへと仕事を求めて、極貧のなか散髪屋などしながら移動していく阿波根昌鴻がいるはずです。いうまでもなく、阿波根は、伊江島米軍土地闘争を1950年代半ばから牽引しつつ戦後沖縄の平和反戦運動における象徴的な存在となっていく人です。それから、山入端ツル『三味線放浪記』や上野英信『眉屋私記』といった傑出したルポルタージュの中に出てくる、沖縄の北部出身の南米移民をはじめとする、いわば「放浪」する沖縄の人間たちの姿もやはりそこに見えてくる。

そうだとするならば、見えないという形、あるいは持たざる形や輪郭のない形で、世界の各所に現われ消えていく沖縄の人間の痕跡を捲り返しながらどう見ていくかということが、吉田さんの本から私のところに届く気がします。

また、この視点はもう少し広げることでもできます。横断的にみていくと、例えば1928年から翌年にかけて、伊波普猷がハワイの県人会の人たちに呼ばれて出かけていきます。移民排斥そして世界大恐慌直前の推移のなか、よく行ったものだと思います。伊波はさらに、ハワイから続けて北アメリカの方に行きます。ロサンゼルスとかですね。その時、例えば、帝国主義から解放された時はじめて沖縄はやっと「あま世」になるんだという、後に『沖縄歴史物語』にまとめられていくヴィジョンにふれながら、かなり踏み込んだ発言をしてゆくわけです。

そして、社会主義への接近を思わせるような伊波の話に非常に強い感銘を受けた、北アメリカ在住の沖縄移民青年たちがいました。彼らは、ロサンゼルスを中心にして、今に続く日系人新聞『羅府新報』を活動の場としていく人たちです。そこで日本語新聞を出し、急速に左傾

化してゆくわけです。画家の宮城与徳やキリスト教者の屋部憲伝といった重要な人たちがいます。彼らのなかのすくなくない人たちはのちに、「ロングビーチ事件」というアメリカ共産党関係者弾圧のなか、ソビエトに送られ結局はスターリン下で粛清されてしまっています。何人かの人たちはゾルゲ事件と関連し、宮城与徳がそうであるように日本の官憲に殺されてゆくという形になっていきます。アメリカ西海岸から太平洋を横断しユーラシア大陸にいたるような群衆的なつながりのなかに、沖縄の人間たちの移動が見えてきます。このあたりの研究は、比屋根照夫さんあるいは加藤哲郎さんが先駆的に論文化されています。つまり、南米アメリカやハワイをはじめとする世界各地へ渡りいろいろなことを学ぶ中で目覚めてゆく、沖縄のあるいは沖縄から離散しつつ群となっていく「群衆」の姿があったということです。この点を踏まえるとき、吉田さんが、カリブからほとんど全世界的に越境していき、各所で「群衆」となって現れる人々の文学的形象を、歴史的痕跡と想像力の軌跡として鮮やかに論じていく過程に、沖縄の人間の近代経験が裏書きされていると見ることも許されているのではないかと思う訳です。

さて、私の牽強付会な読み、というより妄想は、ここから文学に流れていきます。

1920年代、そして1930年代における沖縄に関する文学のなかの「群衆」を、吉田さんの考察を導きとして読んでいくことはできないかとまず思います。そこで、池宮城積宝という人の、『奥間巡查』（1926年）という小説のことが気になるのです。この小説は、沖縄の文学のなかでは大変有名で、おそらくトップクラスの小説として考えられているのではないかと思います。実際面白いのですが、今日は細かく読んでいくことができませんので、大まかな説明をしたいと思います。

『奥間巡查』の著者である池宮城積宝という人は、自由人というか、まあ放浪人で、天才的な歌人であり小説家です。若くして亡くなってしまうのですが、『解放』というプロレタリア文学のメッカのような雑誌、この雑誌は谷崎や芥川のような大物から堺利彦や荒畑寒村ら社会主義者作家たちを擁するメディアですが、その雑誌の1926年10月号に懸賞小説として選ばれ載った作品が、積宝の『奥間巡查』です。関東大震災で、「群衆」が粛清された直後という際どい時期ですね。さて、作品の筋を大まかにいうと次のようになります。

舞台は沖縄、那覇です。そこの「特殊部落」が舞台となります。「支那人の子孫」の集住区ということで、大変に貧乏になっていて官憲からも狙われており、「賤業」で生計をたてひっそりと暮らしていると書かれています。そんな部落の人間である、奥間百蔵ひゃあくうという青年が、なぜか警官採用試験に受かってしまった。そして巡查の服装をひけらかすようにして、じゃらじゃらと警棒とサーベルをもって巡回するようになる。

注釈的なことを言いますと、舞台となっているのは、「久米村」という地区です。沖縄では「くにんだ」という呼び名で通っていて、孔子廟や福州園があつたりして今も独特な雰囲気かわずかながら残っています。中国（明・清）からの帰化人の子孫の人々が、今でも大きなコミュニティをつくっています。近世以前は中華秩序のなかいわゆる琉球国の学問と外交を儒学を軸とする漢文素養にもとづいて連綿と担う文化的エリート集団がいた村だったのが、近代以後、対アジア関係の激変、ありていにいえば漢文的価値あるいは中国的価値の社会政治的な縮減を受けていく形で、没落がおきていくということが背景にあるのではと考えられます。そこは言ってみれば、東アジア近世近代の政治的社会的な力関係が反映される場であったわけ

です。小説は、そこを「特殊部落」として描いていきます。

そんな「部落」のなかの「奥間百歳」という青年が、警察試験に合格し、巡査という下級公務員に過ぎないとはいえ村で初めて官吏の誕生となり、皆が喜ぶわけです。あいつが警官になったのだから何かお金が貰える、何か利便を受けることになる、皮算用していくわけです。ところが、どうも変なことに、利便どころか、やたら喧しく風紀の取り締まりや衛生の注意ばかり言って、村人たちに厳しくあたるんですね。まあ当然そうなります。小言をいったり演説をぶったりして、急に嫌な性格になってきたなどと噂し合う。そのことを奥間巡査自身も意識せざるをえない。齟齬が生じてくるわけですが、そこで奥間巡査の監視の目が注がれるのが、「特殊部落」の非衛生的で怠惰な生活なわけです。彼の警察のまなざしにより近代沖縄における「スラム」生成が発見され、発明されているといえるかもしれません。

お前たちは汚いなんて言い出す、そして同僚たちがやってくる。この当時の沖縄県警ですから、鹿児島出身の警察官が多いのですが、その人たちに実情を見せたくないから、お前たちは毎日風呂に入るようにしなければならないとか毎日酒など飲んで騒いではいけないと言う。本当なら取り締まられるべきだ、とすると自分がお前さんたちを捕まえなければいけない、親戚だろうと容赦はしない、と言っていくことになります。そうした警告を群衆の前に出て話すのです。小説中に実際に「群衆」という言葉が使われています。

当然のこと、彼はだんだん孤立していきます。「部落」の人たちは、あいつは嫌だと、敵意を持つようになる。一方、警察署の中では、あいつはあの「部落」の出だという話になり、挟み撃ちのような状態に陥って組織の中でますます孤立していき、行き詰ってしまいます。そんなあ

る日、沖縄文学ではお決まりですが、那覇にある「辻」という遊郭に出かけます。行き詰った男は（行き詰っていなくても、男たちは）、とにかくたいてい辻につまり遊郭に行くのですが、そこで彼はひとりの遊女「カマルー小」という綺麗な女性に出会い、入れあげます。その当時の沖縄は、「ソテツ地獄」と呼ばれる大変な経済的貧窮の中にありました。湧上豊人編『沖縄救済論集』（1929年、改造之沖縄社）なんていう本が出てよく読まれるくらいの逼迫した状況です。カリフォルニアでの排日法前後の時期ですから北アメリカ大陸への海外移民も細っていき、日本本土も怪しくなってくるという時代ですね。

そんなあおりをうけ「カマルー小」の家も経済的につぶれてしまい、自分が遊郭に身売りしなければならなくなったということを切々と話すわけです。その話を聞いた奥間巡査は、もう彼女が大好きなわけですから、月給のほとんどの「23円」をはたいていくのです。調べてみるとかなり正確な額で、当時の沖縄県警巡査の月給は23円くらいということのようです。そうこうするうち、何日も遊郭に居残りしたりする。折も折、台風がやってきて、巡査ですから警備に回らなければならないはずなのに、遊郭にこもってしまう。彼が摘発していたはずの怠惰と怠慢に陥っていき、自分はこの娘と別れるわけにはいかないし、なんとか身受けしたいと思いつめることになります。ついには、自分も犯罪を犯してでも他人の金を騙し盗るのではないかという犯罪の予感に怯え、自分の変容に恐怖まで覚えていきます。

こうして思いつめていくなか、奥間巡査は、遊郭近くの墓場で不審者を捕まえます。この男は、貧乏なため、大東島（おそらく南大東島の製糖工場か北大東島の燐鉱）に出稼ぎに行くために那覇に出てきたという。この当時すでに大東島は、プランテーション会社による疑似国家的な

支配と経営がなされているような不思議な場所でした。その島へ行く手続きの中で、結核の検査に引っかかって行けなくなり、スラムのような町でぶらぶらしていたのです。そしてたまたま入った料理屋に紙幣がおいてあり、それを盗んだことを方言でしゃべります。そんな不審者を逮捕して、奥間は嬉しいわけです。彼にとってははじめての手柄です。しかし、警察に連れて行き調べてみると、自分が身受けしようとしている娘、あのカマルー小のお兄さんなのです。警察では、「奥間、お前にしては偉いことをした」と言われ、早速この男が金の出どころだという妹を取り調べるために連れてくるように、と言われるところで終わっています。彼は職務で手柄をあげるその刹那に、自分の思惑の全てをみずから崩壊させていくことになるわけですね。こうして、小説の最後は、次のように書かれています。

「おい、奥間巡查、その妹を参考人として訊問の必要があるから、君、その楼へ行って同行して来給へ。」それを聞くと、奥間巡查は全身の血液が頭に上って行くのを感じた。彼は暫時の間、茫然として、部長の顔を凝視めて居た。やがて、彼の眼に陥穽に陥ちた野獣の恐怖と憤怒が燃えた。」

この最後の奥間巡查の「野獣」への変容は重要で、「恐怖と憤怒に燃えた」姿には、どこか群衆への接近が示されているとも読めてきます。さて、ここで私は、吉田さんの本に導かれつつ、この小説をいわば徴候的に読んでみたいと思います。大事なものは、群衆が暴徒化する予兆というものが、警察との直面という局面のさなかで現れてきているという点だと感じるんですね。ストライキにしてもデモにしても、あるいは抵抗運動にしても、それらの動きが沖縄のような植民地的社会で起きてくるときには、常にそ

れは、宗主国が持ち込んでくる非常に厳密な実定法、近代法的な処罰を含んだ組織的な警察暴力装置との抗争にならざるをえないはずです。この場合の警察は時として軍隊と区別がつかなくなります。そうしたい、植民地状況下では、各地域における習慣法、沖縄であれば村内法と言われるものと国家の法そして司法・処罰制度との間で大きな暴力的な交差が起こります。沖縄の近代でいうと、例えば、シャーマンである民間の「ユタ」をめぐる処遇や土地割制をどうするのかといった点で。民衆世界と警察的な力は激しく抗争します。カッコつきですが「女」の位置づけをどうするのか、不逞者や病者あるいは貧困層をどう扱うのかという局面が、警察的な力と民衆との矛盾に満ちた接触面となるはずです。こうした矛盾が、徐々に近代化していく社会変化の中で生じていくときに暴力的交差となるのは必然です。この交差はまた、極めて暴力的な形をとる処罰性をはらんでいて、警察庁を頂点とする国家による直接的系列的な官僚統治があることはいうまでもありません。

2. 統治の闘争的な界面

その警察を介した国家統治に対して、民衆というか群衆の側には群衆なりの統治があります。どんな場合でもそうですし、今でもそうです。吉田さんは論考のなか、亡きエドワード・サイードに捧げられたバルタ・チャタジー『統治される人々のデモクラシー』（田辺明生・新部享子訳、世界思想社、2015年〔原著、2004年〕）などの思考を踏まえて、国民主権の束に統合されることのない人民の「自己統治」の可能性を繰り返えし鋭く論じていきますが、ここに『奥間巡查』を読み換えていく示唆が開示されています。つまり、この小説の中にも、反転的な形で民衆の自己統治の側面が見出されてくるということです。国家暴力による警察統治を、フーコー

いうところの反操行において逃れていくような民衆の「自己統治」という解体的な闘いが見えてくるということです。それこそ、チャタジーがいう、アンダーソンの古典的ナショナリズム導入における法主権的な均質空間認識に抗うような混成的な民衆世界の政治的空間の現われがあり、この現われは市民社会的な秩序とのつばぜり合いを生成させ統治を書き換えていく局面を生んでいくわけです。しかも、この混淆性を、奥間巡査の心身が自己矛盾的に具体化しはじめるわけです。奥間巡査はこの時、警察的な対象としてのみずからの「野獣」性にふれてくことになります。

この小説で注目されるのは、国家的な闘争と民衆の「自己統治」的なものがぶつかって、ある種の干渉作用を起こすその限界領域として巡査の身体があるということなのです。おのずと、奥間巡査の心身は分裂せざるをえない。彼の内部における戦いというものは、彼自身からも、また他人からも見えないのです。おそらく奥間は、自分の中で何が起きているのかをよくわからないはずです。参照できる歴史もモデルもないわけです。そもそも沖縄に警察官などいなかったわけですから。近代的な制服もなければ、月給なんていうものもない。小説中に出てくる言葉で言うと、「郵便貯金」なんてものも当然ありません。それら諸制度を治安維持という形で守備する国家の尖兵としての自分と、犯罪にかぎりなく近づいていかざるをえない自分との引き裂かれが、奥間巡査のなかで起きていくわけです。私は、この点、近代沖縄社会の緊張を、警察機構における一地元出身警察官の心身に具現化した池宮城積宝の目の付けどころを鋭いと感じます。群衆を考えよ、警察を考えよと言われている気がします。

ちなみに、沖縄で、奥間のような警察官の詰め処ができた初めは、粟国島と与那国だそうです。要するに今と変わらぬ島嶼防衛の実践で

す。近代沖縄のかなり早い時期から台湾海峡の軍事防衛と警察組織化は連動しているといえると思います。ここにはテキスト関連でいうと、石垣島にまずおかれた気象測候所も軍事情報からみの連動もあるように感じます。さて「交番」ということでいうと、沖縄で本格的にできていくのが大東島とラサ島〔沖大東島〕ということのようです。要するにいつ暴徒化してもおかしくない「不逞」労働者をどう取り締まるという課題が、どうやら沖縄の警察派出所の始まりにあるようなんですね。国家からすると暴徒化する沖縄民衆、民衆からすると争議の主体となっていくような群衆化の予兆が、沖縄文学のなかに見え隠れしているということになります。

奥間巡査が、自分が知ることなく自分が体現しているのは、単純な言い方ですが、現地支配コラボレーターとしての心身の引き裂かれというものと考えてよいと思います。この引き裂かれのなかで、奥間巡査は、不潔や怠惰をその徴候において発見し、場合によって発明していくような、犯罪人類学的なまなざしを獲得していきます。自分の身辺、「特殊部落」に犯罪の兆候を見出し、これを予防的に鎮圧していこうとするわけです。ただし、この時、鎮圧の対象にまず自分がいることにある意味直面していかざるをえないわけです。誰より先に自分自身が犯罪の予兆として存在しているということに気づいていくのが奥間です。不潔で怠惰で墮落した「土人」としての自分が、警察のまなざしによって自分の視界のなか浮びあがっていく。

余談に近いことですが、アメリカ軍ヘリパット基地建設で地域住民と警察や軍隊の間で激しい闘いが沖縄の北部地区「高江」で起きたさい、作家の目取真俊さんが大阪府警（沖縄の山間部でアメリカ軍基地建設守備目的で民衆に対峙しているのが大阪府警であるという状況に注意してほしいのですが）に「土人」と呼ばれるという事件が数年前に起きていました。沖縄

ではたいへん問題とされました。その出来事を踏まえるならば、沖縄の住民そのものが「土人」という犯罪の兆候とされるような植民地の構造においては、その土地の現地人警察官は実は自らを捜査しているわけであって、この捜査は自分と近親者や愛する人を暴く以外にないのです。この点においても、奥間巡査の生の在り方が、実は植民地支配がせめぎあう限界領域というものを体現していることが分かります。奥間巡査は「部落」と警察の間で孤立して辻遊郭で出会う娘との時間に逃避先を見出してゆくのですが、その逃避の中で、先ほど述べたように、自分というものが犯罪者となる近い未来を正確に予感しているわけです。ここにも、群衆のなっていく者がひとり生れつつあります。

さて、ここからさらに妄想をひろげていきたいと思います。『奥間巡査』という小説を吉田さんの本との照応の中で読みつつ考えるのは、次のようなことです。

これも『持たざる者たちの文学史』の中の重要な思考をお借りするのですが、吉田さんは、「スラムと植民地をつなぐ」という想像力の潜在力に注目し、コンラッドなどの小説を論じています。海を渡る者たちの航跡と交差のなかに、宗主国スラムと植民地との連関が示唆されていきますが、小説『奥間巡査』にも似たような点がおきているのではないかと思うのです。そのことをはっきり開示するのが、小説中で1回だけ言及される「大東島」です。沖縄本島から東つまり太平洋側に400キロメートル離れたこの不思議な政治的社会的形態を持つ島は、東インド会社とまでは言いませんが、玉置商店をはじめとする製糖会社（南大東島は製糖が中心、北大東島は燐鉱が中心）がプランテーションを作って警察権を持ち、学校も経営し、島だけで通用する砂糖本位制の貨幣（通称「大東島通貨」）も自ら作ったりして、出入管理から衛生管理か郵便から何からなにまで全てを牛耳っ

ています。その大東島に、沖縄本島や日本本土からのみならず、宮古島や八重山諸島からの「移民」が渡ってきて小作や鉱務に従事するわけですね。そのようにして、大東島という帝国の周辺をうろつきながら、その生の群れの独特の統治性において国家の警察制度に潜在的に対抗し、「帝国のナラティヴ」を取り囲む群衆となって、国家や資本あるいは民族主体の統治システムに対峙するという局面が見えてきます。その大東島が、僅かとはいえ小説のなかで逃避先として言及されていることはまさに吉田さんのいうところの「持たざる者たち」の文学史を構想する点で、看過できない点だと感じるのです。

そうした点でいえば、先ほども述べた、国家暴力による統治と群衆の自己統治とが衝突する界面への注視を、この小説は私たちに求めているということになるのだと思います。そして、こうした統治と統治のぶつかりあいは、警察だけでなく群衆の発生的な条件への思考にも連動していきます。たとえば、時間とお金です。例えば奥間巡査その人は、すぐにそのモットーを自ら裏切っていくことになりますが、貯金をしなければいけない、自分は「郵便貯金」なるものを始めるなどと語り出します。当然ながら家の者たちは彼が何を言っているのかわかりません。仮にお金があったとしても（もちろん現実にはお金なんかないわけですが）、それを預けるといって何故どこかに預けるのか？となります。この時代で言えば、ほとんどの都市部の一部の市民のみが利用していて多くの民衆にとっては縁のないと思われる（とは言ってもそろそろ無理矢理に縁が生じさせられていくことになる）「銀行」というものが那覇市に誕生しはじめたばかりです。その銀行とも少し異なる「郵便局」に貯金して利子を増やそうなんていう理屈がとおるはずがありません。にもかかわらず、この金融資本の力学は、すでに民衆を包摂し

非常に強く統治しはじめているわけで、移民や遊郭への前金「身売り」などに見られるように、時間を少し先回りして奪い死ぬまで縛り管理するという事態が起きてきます。沖縄のような植民地的社会においては産業発達が極めて歪な形をとりますから、この資本の時間のなかにおいては、すべてが警察的統制の対象とならざるをえません。日本語を使うこと、時間どおりに動くこと、身ぎれいにすること、税金を納めること、酒を節制することといった規範化は、即お金に繋がります。また、繋がっていないとお金の巡りからはじかれることになります。植民地的社会の権力の編成のなかで、自らを統制しみずからを処分していく人間が作りだされていくことになり、この警察的生産力が、この小説のすみずみを満たしているとみえるのです。むしろ、小説のなかの「群衆」は多かれ少なかれその不適応者となり、社会の底辺に追いやられていくのはいうまでもありません。

たとえば、不潔ではいけないと奥間巡査が村の連中に言ったりするのは何でもないように読めるのですが、これなども沖縄近代の文脈でいえば、常に大問題となったコレラやマラリアをはじめとする法定伝染病対策に直結するので、衛生面での戸口調査は、おそらく非常に徹底していて激しいものがあるはずです。沖縄県の警察資料をみていると、伝染病に関する衛生警察の事項は記述がたいへん詳細になっています。関連して、教育面での素行不良者の扱いや言語関連の事項は軍隊の徴兵制と連動していきます。税徴収の厳密化でいうと、大正9年(1920年)以降実施されていく国勢調査を沖縄住民にどのようにして理解させ徹底させるのかといった問題も警察が関与していたはずです。いわば、生活全般を生(いのち)の細部にわたって統計化し量化していく作業の急転において、警察組織がすべての網目を作っていくことになります。ややボンヤリ者のように見える奥間巡査

は、この作業の突端において群衆の内側で生活しながら他ならぬ群衆の生成に直面しつつ、良き警察官たることに見事に失敗し今や群衆のなかに転じていこうとしているわけです。とするならば、この小説は沖縄の郷土性を豊かに表しており、実際にそのような評価もあります。その沖縄的な表象というものが徹底的に警察的なまなざしにおいて発見され発明されていくことを暴いているともみえてくるわけです。怠惰でルーズで貧乏で言葉もあやふやな沖縄民衆、それは懐かしいイメージに包まれもするでしょうが、しっかり見張られているのです。警察的なまなざしが、沖縄的なものの徴を見出しマークしていくとっていいかもしれません。とするならば、そのマーキングの背後には、いつ暴徒化してもおかしくない群衆が待機し生み出されていくことになるのではないのでしょうか。

このように考えると、例えば沖縄の近現代文学というものを日本的なもの、あるいは同化と異化といった形の対抗性でとらえることには限界があると考えられていきます。沖縄(人)対日本(人)といったエスニックな対抗性そのものが国家統治の枠内にあり、それは警察的な統治のなかで生み出されているにすぎないかもしれないからです。むしろ、ここで注目していいのは、郷土的なもの／沖縄的な風物とも、国家的なもの／警察的な制度性とも異なる、その隙間が生じはじめ、群衆が生まれ始めているということです。郷土的なものをも国家的なものをも書き換えないではおかしいようなまさに群衆の混淆的な動きが、沖縄という場所性と歴史性にと規定されつつも、あらたにせりあがってくる様相が見出されていていいのではないかと思います。その生成は、国家的なものであったり郷土的なものであったりするより先に、世界的な動きであるかもしれません。吉田さんの本が示唆するうごきそのものです。

むろんのこと、群集の生成にみられるような植民地的社会の人間の生の分裂的な生産が、国家の統治にとって果たしていいのか悪いのか、私にはよく判断が付きませんが、少なくとも現地の人間の中にこれだけの分裂と分断が起きるということは、もしかすると国家統治にとってはちょっと都合が良いのかもしれません。この分裂を上手く利用すれば、地域内部での対立へと民衆を動員しながら一挙解決あるいは救済ファクターとしての国家への請願を出させる統治のツールとなるかもしれません。そうなれば、沖縄社会における市民社会の登場や民族意識の現われ方といった側面と、警察をはじめとする日本帝国との制度的な共犯性というものをどう考えるのかということは、やはり重要になってくると思います。関連して、欄外的に言いますと、この当時では生活改善運動と呼ばれる規律化が地域社会の大きな課題となっていく、文学的モチーフとしても出てくるのですが、こうしたいわば市民的な生の編成に警察がどうかかわるかを考えるさい、沖縄の民衆にとって、近代的な職種として警官が目標になるという点も少なからずあったのではないかと感じるのですね。沖縄で高等師範学校や農林学校などの高等教育を受けていない人が官吏になろうと思って考えるのは、おそらく警官だったのではないかと。例えば台湾に行って警官をしている人のかなりの比率が沖縄出身というようなこともあります。池宮城積宝でいうと、『奥間巡查』とは別に『蕃界巡查』なんていう小説も書いていたりします。こうしてみると、実は警察官というのは、沖縄にとって考えるべき大きな点でもあるのだという気がします。そして、警察がでてくるところ、群衆は必ずいるはずです。加えてメモめいたことをもう1つ付け加えますと、左翼運動や労働争議といった局面と沖縄民衆の群集化の関連のなか、1921年つまりこの小説の発表直前に裕仁が沖縄に来ているという事

情も考えたりします。摂政裕仁は洋行のついでに沖縄に寄り、半日ほどうろついたりして騒ぎになっています。首里城に行った変な写真なども残っていますが、その騒ぎの影響は小さくなくて、警備体制の大きな変化が起きています。国体などでもそうですが、天皇とか皇族が来るたびに沖縄社会には警察的権力が危機的にいきわたってしまう歴史があるわけです。このあたりのことも考える必要があるかと思いました。

3. 「母なるものの更新」と「舌」

さて、『奥間巡查』だけで随分と時間をかけてしまいました。しかも、吉田さんのご本からの連想が流れすぎていますね。申し訳ありません。ここから、2点目の話題をとりあげます。吉田さんのご本でいうと、「第五章 植民地主義と情動、心的な生のゆくえ」が考察の軸となります。この章、阿部さんと同感なのですが、私も感動しました。胸に迫るような思いで読みました。吉田さんはこういうふうに書いておられます。

「重要なのは「伝統」の再発見や、被植民者たちの知を対抗言説へと回収することが目論見ではないということだ。そうではなく、名を与えられていない植民者（ミランダ）の母、そして被植民者の母シコラックスの存在は想像可能であるにしても、そもそも到達不可能であり実体化はできないということが明示されている。そして何よりも、父性的な植民者の象徴たるプロスペロの勇ましい雄弁のなかにある自傷的かつ被虐的な響きへと耳を傾け、「親密さ」を聞きとる行為こそが、母性性を実体的なものとして恢復する企図が、そもそも可能でないどころか誤謬であるという認識をもたらしている。父性とされるものに秘匿された自らかせ崩壊する瞬間と母性性の不

可能性とを架橋するこのラミングの耳こそが、植民地的言説における母なるもののイメージをかつてない形で更新している」(p.261)

私もいつかこういう考察ができればと図々しく思いました。素晴らしい論述です。さて、私も吉田さんの思考に沿いつつ幾つか考えたいのですが、その考察の手がかりとして、ここでは、戦後沖縄を代表する思想家の新川明さんの論に注目したいと思います。もちろん、吉田さんの論考と絡めながらです。今年2022年、沖縄のいわゆる「日本復帰」から50年を迎えるということでさまざまな企画が進んでいます。私自身は鼻白む思いで見っていますが、そんなレベルではなく、50年以上前にすでに新川明さんは言論上ですさまじい格闘を繰り広げています。今読んでも憤りの深さや強さが痛いように伝わってくるものです。『反国家の兇区』（1971年、現代評論社〔再版1996年、社会評論社〕）所収の代表的論考がそれにあたりますが、1960年代半ば以降に集中的に書き継がれていく批評にいわゆる反復帰思想の核心が示されています。まるで呪詛のような鋭い文章をいくつも書いていかれていますが、ただ、何とも男性主義的でマッチョな文章が多いと感じます。ただ、時々ですが、奇妙なエピソードが挟まれていて、私などはそこが気になったりします。不思議な背理というか亀裂が生じているという感じがして、そこにこそ惹かれるのです。幾つかあるエピソードの中でも特に私が注目したいのは、次のような新川自身が語る自分史の断章的記述です。

新川さんは、幾多の論考で、復帰を同化的幻想として根底から批判しつつ、沖縄は沖縄の異族性、異質性において国家の毒となっていくべきだと主張されています。それは日本人とは全く異なる、沖縄人の絶対的な異質性の闘い

のあり方なんだということです。ただ、そう言っている「自分」は残念ながら「片親がヤマトウンチュ」で「羞恥」を感じていると語り出しています。その恥をぬぐうようにして、「妻」から毎日のようにウチナーグチを習って今や日常会話なら問題なく話ができるようになったということを書いています。その部分をちょっと読みあげてみます。

「わたしはその彼に、内心ではげしい反撥と軽蔑を感じ、「おれも同様に片親がヤマトウンチュだが、しかしおれは断じて沖縄人である」と胸の中でつぶやきつづけた。そして、家庭環境のせいで、沖縄に育ちながら沖縄口（方言）が満足にしゃべれないことに強い自己嫌悪と羞恥を覚えて、アパートに帰ると妻を相手に沖縄口の習得をはかり、職場の同僚で沖縄口のうまいのを相手にひそかにその実践をこころみたりした。（中略）思えば60年安保をはさんで前後4年の大阪生活で、わたしが得たものといえば、一つはいわゆる「母なる祖国」幻想を現実の生活体験を通して突き崩す契機を持ったことであり、もう一つは沖縄人として、その言語を、アクセントの誤りや語彙の貧しさはやむを得ないとしても、なんとか口舌にのせることができたことの二つだけといえるかも知れない」

（「非国民の思想の倫理」、初出『叢書わが沖縄 第6巻』（木耳社、1970年）、のちに『反国家の兇区』（1971年、現代批評社）に所収）

おそらくこの部分、新川さんの激烈の反復帰論のなかでごく些細なエピソードとも見えるのですが、私にはとても興味深い文です。『持たざる者たちの文学史』において、吉田さんはラミングそしてグギにおける「母性的なるもの」

を、時にというより常に転倒的に読んでいかれていてたいへん説得力を持つのですが、その吉田さんに倣いつつ、私も新川を転倒的に読んでみたいと思います。たとえば、吉田さんは、フランク・ファノンに関して「有罪感の人種配分」（吉田、243頁）を参考にしつつ、「恥」という情動のジェンダー的配分の問題、特に女の方に恥の情動が振り分けられていく過剰性の問題に触れていかれています。この問題は、さきに阿部さんも注目されていましたね。私もたいへん興味深く読んだ部分です。そして、吉田さんのご指摘は新川を読みなおしていく、あるいは戦後沖縄の思想と文学を読み返していく大事なヒントを与えてくれていると実感するからです。

引用した新川さんの言葉に戻りたいのですが、ため息をつきたくなるほど、なんとも男性主義的でファロセンティックな傾向があからさまです。でも、何かが奇妙に捻じれているんですね。指し示そうとする言葉の内容と言葉の配置のありかが背反していて、「情動の配分」が過剰性と過少性にともにぶれ続けています。対立した方向に同時に駆け出してしまうような印象さえ受けます。

その印象の要因として、つぎのようなことが言えると思います。「おれも同様に片親がヤマトウンチュだが、しかしおれは断じて沖縄人である」として「羞恥」を拭うべくなす行為というのが、「口舌」において「妻」の「沖縄口」を真似る、妻の言葉を孕む、という事態が書かれているがゆえなのです。そして、私はこれを大事な亀裂だと感じます。

ウチナーグチ（沖縄口）習得をめぐる新川における、身体の訓育あるいは「舌」をめぐる葛藤劇というものは、父性的なるものの不在は言うに及ばず、新川明自身がたびたび強調してやまない「歴史以前」に及ぶ沖縄人のアイデンティティ起源の遡行という神話性からずれてい

て、横に外れてしまっているという気がします。この時、今日も参加してくださっている木橋哲也さんの翻訳で触れることのできるクツツエーの『敵あるいはフォー』（白水社、1992年〔原著1986年〕）を参照するならば「フライデー」ならぬ新川の「舌」は、深いジェンダー的混乱でもつれています。幾つもの越境的侵入とヒエラルキー的混乱を経ながら、語られない／書かれないままそこに現われて消されていこうとする「妻」という言葉の始まりをしめしています。新川において沖縄人たる要件とされる「ウチナーグチ」の始源にあるのはこの「妻」の言葉であり、この言葉の反復学習を通じてしか沖縄語は語られないということを新川の言葉は語ってしまっています。

そして、ここでは同時に、もう1つの横断線が見出されます。「ヤマトウンチュ」と呼ばれている「片親」の存在です。「半日本人」たる自分を否定しつつ「沖縄人」としてみずからを定義しなおそうとする新川の心身あるいは「恥辱」を担っているとされる、この「ヤマトウンチュ」の「片親」は、むしろもう1人の「ヤマトウンチュ」ならぬもう一方の「片親」とともに、ジェンダーの規定が不可能となり、見えないまま新川の「沖縄人」の始まりとして回帰してきているわけです。不在化されながら、新川の言葉のなか

ここで、あらためて新川明を考えているとき、あるいは沖縄の文学を考えていこうとするとき、吉田さんのご本で示唆されているように、やはり「母なるもの」の位相、そして「恥」という情動をめぐる契機はとても重要になってくると思われます。あえて言えば、根本的に混淆的であるという、近代沖縄の人間の位相がそこに浮かび上がることになるのではないかと思います。たとえば、1960年代以降の新川言葉は、特に「復帰」前後の非常に雄々しい論争と闘争のなか雄々しくなっていますが、同時に、そこ

には、1954年の彼の詩のタイトルでいうと「みなし児の歌」が潜在している。存在することと不在であることが同時に開示されるというような形で、帰属性あるいは単一的アイデンティティといったようなものからいつもずれていくしかない近代沖縄の人間の心身というものが、「母」を通して「恥」とい情動を通して見えてくるかもしれないと感じます。

4.「有色」の重ね書きへ

さて、大急ぎで、3点目を喋ります。話すというよりは、話題提供というくらいのことしかできそうにありません。吉田さんのご本のなか、1955年にインドネシアで開催されたバンドン会議のことがたびたび出てきます。戦後沖縄の文学や思想をみていくうえで、バンドン会議はやはり大事だなと私も思います。さっき新川さんの「みなし児の歌」のことを話したのですが、その掲載紙である『琉大文学』では、バンドン会議のことがかなり話題とされています。自分たちも何らかのかたちでバンドンが掲げる脱植民地主義運動に繋がりを、大学生の頃の若き日の新川明や岡本恵徳あるいは川満信一といったような人々が盛んに論じています。竹内好たちの国民文学論の文脈もあるのですけれども、会議に非常に強い期待を持っていますね。ただし、吉田さんが言うように、このバンドン会議を論じるライトの絡みで言及されてくるように、手放しで褒めることも難しいような、冷戦下での新たな帝国再編なりアメリカ帝国主義との重層性みたいな問題が出てくるということを考えたときに、植民地主義をあらたに再編されるレイシズムとのなかで、あるいはナショナリズムのなかでどう考えていくのかという点が、今に続く課題となるような気がします。それは、吉田さんのご本でもたびたび言及されているスカルノをどうみていくかという点とも深く関わりますね。

それから、建国して間もないインドネシアとの関係でいうと、沖縄では、戦時中に日本兵としてそこに進駐した沖縄出身の一兵士が体験した「ムルデカ（独立）」前後の混沌を沖縄にかさねていくような、『黒ダイヤ』という不思議な小説が、戦後沖縄の代表的ジャーナリストの太田良博によって1949年に書かれているんですね。この小説を批判する形で、新川さんは「戦後沖縄文学批判ノート」という記念碑的批評を『琉大文学 第9号』（1954年）に発表しています。こうしてみていくと、あるいはインドネシアと沖縄の関係というものの、あるいは会議の文脈というのは、実はひそかに戦後沖縄文学史のなかに痕跡を残しているわけです。では、この痕跡を今どのようにして想起するかという時に、やはり新川明の作品のなか『有色人種（抄）』というテキストが思い起こされてきます。

この詩は、これは新川明が1956年に書いた詩で、『琉大文学 第11号』（1956年）に発表されています。バンドン会議の直後に出されたこの号も米軍によって発売禁止になっています。時間の関係で、一部のみ読んでみますね。

ほとばしった血を啜って歌った歌を／忘れた　きょうのかなしい兄弟たちよ！（略）
故郷の町の公園の　ベンチに腰掛けることも。／共に学校に出ることも許されない
／長いしきたりの／皮膚が黒いという尊さについて／だが、キミたちよ。／考えたことはあるのか。　この黄色いボクラ前で。

黒真珠のように輝く肌／エネルギーなキミたちの口唇／兄弟よ。／鉄板のようなその肌を磨き。／親たちの口唇から洩れた底知れぬ悲しみと怒りの歌を

たくましいキミらの口唇に再びのせ。／熔けた鉄塊のように燃え。／キミたちの上におゝいかぶさり／キミたちを押しつぶそうとするすべてを／焼きつくせ！」

ここでの新川の詩の言葉もファロセンティックです。そしてまた、やはりどうにもエロティックであり、ホモエロティシズムがみてとれます。そして口唇性が強調され、皮膚という界面への注意深いまなざしが書きこまれています。それから、「喉」から溢れ出てくる「歌」ですね。身体において危うく触れ合う界面への注目が凄まじいのですが、この身体表現をめぐる情動というものを通して、朝鮮戦争後の沖縄に駐留するおそらくは黒人兵たちに鋭く焦点を当てた情動が読みとれます。ただ、この「有色」は、なにより幾多の「有色」性というものに広がっていくものでもあります。「黄色い」自分はいうまでもなく、幾多の人種の交差と混雑性をそこに想像的に読み得るということです。

吉田さんがご本でくり返し論じておられるラミングを想起しつつ言いますと、たとえば「あの人はアメリカ人の黒人だ」と思われている人がフィリピン人であったり、場合によっては日本人であったり、あるいは「この人はフィリピン人だ」と思われている人が実は「アメリカ人」であるといったことは、いくらも起きていたはずですし、今も起きているはずです。何が言いたいかというと肌の色が引き起こす、自己と他者との間でおこる、身体イメージのズレや複数性のことなのです。場合によっては、パッシング性を含むような有色の多層性ですね。たとえば、戦後間もなくの沖縄でいうと、あいつは「ジャパニー」だと呼ばれて日本本土から来ている人だと思われていた人が実は強制連行されてきて戦前から沖縄で生きている在日朝鮮・韓国の人たちであったりするということはよくあることです。そしてまた、奄美の人たちが沖縄においてどのように捉えられてきたかということも大きな問題を孕むはずです。名前の感じからすると本土の人のようにだけけれど、印象としては沖縄のような感じもするといった混乱は、多かれ少なかれ沖縄で生活している人にはあったように思い

ます。これが、実際、在日や奄美あるいは本土出身の沖縄生活者の人達の身になると、もっと切実な問題となるはずで

ます。そうすると、やや広げていうと「有色」というのは、「われわれ」というものの在り方の根元的な複数性とに関わるという気がしてくるわけです。人がそう思い込んでいる人種や民俗あるいはナショナリティといったことと実体がズレるということは、普通に起きてくるのです。沖縄初期から言えばアメリカ軍属のフィリピン人や、インド人のひとも結構いたりするのです。朝鮮半島から渡ってこられた方たちは多数おられる。そして、大事な点ですが、この当時の沖縄の社会について、土井智義さんがとても重要な研究をされていますが、市民としての政治的主体は「琉球人」であって、それ以外は「非琉球人」というかたちである種の差別化対象になります。ですから、「ジャパニー」と呼ばれるような人たちや奄美の人達もまた、あらたな「色人種」となるとさえ言えるわけです、

そしてなにより、1946年の2月ぐらいから、多くの「混血」の人たちが生まれて沖縄社会のなかで、特に無国籍児とよばれるような人たちが社会で問題化されていくことになります。多くの「混血児」と呼ばれる人たちは、新川さんの『有色人種(抄)』のなかの言葉を借りて言うと、「共に学校に出ることもかなわない」ような人種化された線引きが生れて来るともいえます。沖縄社会にいながらして見えなくなっていく、言わば「持たざる人」たちが社会を構成していくのが戦後の沖縄ということになりますが、この人たちの群集化を沖縄社会のなかでどのように想像しうるかということが非常に重要になります。来たるべき共闘というか群れの構成力を考えていこうとすると、やはり新川さんの『有色人種(抄)』には、思考の手がかりがあると思います。つまり、見えなくなっている共在性の獲得にむけて、人種ラインを書き換え超え

ていくような社会の組み直しが、互いの歴史的
文脈の溝をまず知ることから始まる、その
ことが示唆されていると感じるのですね。

今なおそうですけれども、それが呼びかけら
れている、いや、あるのだ、そこにいるのだと。
ようやく最後になりますが、吉田さんは、コン
ラッドの『ノストローモ』に言及しつつ、こう指摘
していました。で、この指摘を引用して私の妄
想話を終わりたいと思います。

「コンラッドの群衆感には、作者の政治
的視野によっては包摂しきれない、一見
まったく自発的な声を収奪されているよう
に思える「移民」や「原住民」の蠢きが予
示的な抵抗として書きこまれている」。

さっきの新川の反復帰論のなかの「妻」がそ
うでしたけれども、あるいは『有色人種(抄)』
のなかのあの「黒人たち」がそうでしたけれど、
国民的あるいは民族的な政治的主体モデルに
おいては見えづらくなっている存在の裏側に、
予兆としての群衆の動きがひかえつつ生じてい
ると想像する大切さを、吉田さんの『持たざる
者たちの文学史』から学びたいと痛感していま
す。そのことを述べて、私の発表を終わりたい
と思います。ありがとうございました。